



対馬資料館報

第3号

昭和55年3月

編集・発行

対馬資料館
島立民俗資料館
長崎県原町今屋敷
対馬歴史民俗資料館
電 (09205)-2-3687

印刷所

昭和堂印刷
長崎市栄町6-23
昭電 (0958) 21-1234

本館架蔵の 朝鮮通信使絵巻 と仏画について

津江篤郎

慶長二年(一五九七)文禄慶長の役が終り、宗義智の努力が実って慶長十二年、国交回復のための最初の朝鮮使節一行を徳川政権のもとで迎えることになったのである。はじめは戦後処理目的の回礼兼刷還使であったが、あとは朝鮮国王の即位とかが徳川將軍の代替りにくる御祝の使節で、江戸時代に前後十二回にわたって行われた。鎖国時代であったはずの江戸時代は日本と朝鮮との間に正式な国交をもっており、釜山の倭館には五、六百人の日本人(対州人)が常駐していて、日本は朝鮮を通じ

て諸外国、とくに中国など東アジア世界と結ばれていたのである。そうした友好関係が、このような華やかな通信使の行列となり、絵巻として描かれたのである。

絵巻はこの一大行事を記念して、各地の画家が記録画としてさまざまに筆写した。その行路は対馬藩宗氏一行の案内と警護のもとに、対馬から杓岐、福岡それから瀬戸内を通り、大阪に上陸、あとは東海道を陸路江戸へ向った。通信使の一行は四百七十人前後、これに付き添う対馬藩の人員は八百人位、江戸まで往復する間はほぼ六ヶ月のつき合ひであった。当館架蔵のものは陸路行列ばかりであるが、他には瀬戸内海や淀川を行進する光景を写した大船団絵巻も遺されているという。絵巻は夫々役柄の人物の表情までも丁寧に描かれているが、重だつた人物には氏名が書き添えてあったり役名が記されているものもある。本館の「正徳元年辛卯年朝鮮通信使登城行列図」を開けば、まず弓矢をもつた先頭から次々と、対馬藩の馬上の真文役雨森東五郎、真文役松浦儀右衛門……長鎗、三枝鎗……喇叭、螺角、笛鼓等樂の音を響かせて……国書の収められた輿……写字官……正使……副使……従事官

……医師……最後は家老大浦忠左衛門と長い行列である。絵巻の長さ約四十二米にも及ぶものである。文化八年のものは対馬までであるから、行列の最後の方に府中の六十人衆がぞろぞろと隊列を整えて歩く姿は印象的である。

これらの行列図絵巻の中には幕府や対馬藩などが狩野家の絵師等に描かせ、作品を朝鮮国王、公家、諸大名へ進物として贈ったものもあるといわれている。絵巻の外に屏風、浮世絵、浮世絵版画などの諸形式に分かれていた。特に屏風は記録画的な目的を達しながら鑑賞画としてすぐれた作品が多い。

木版画でも行列図を制作しており、この種の通俗的な版本が次々に刊行されて一般大衆にも普及した。第二次(文化八年、一八一)の通信使行列図は板元対州大町三木屋喜左衛門、原図喜多川歌麿となっており、このものが対馬にも遺されている可能性は十分である。又通信使に関する記録は宗家文庫にも多数架蔵されているので、今後の調査研究に期待したい。

本館架蔵のものは宗武志氏、古藤満氏寄贈(長崎県指定有形文化財)齋藤定樹氏寄託の計七巻である。

仏涅槃図(内箱に享祿三年庚寅九月吉日)

室町期の作で絹地に着色の掛け軸。仏涅槃図は周知の通り涅槃会に本尊として掛けられるもので、古来諸寺院所蔵の作品はおびただしい数である。沙羅双樹のもとで横臥する釈尊をかこんで悲嘆する菩薩や羅漢鳥獣の群像の情景の図であるが、後世の作のように泣きわめいて混乱することなく、しんみりとしたおだやかさを感じさせるものである。中央絵仏師の作であろう。

釈迦十六善神図(外箱に明應七年戊午十六善神修福再興正月吉日)

中央に釈迦如来、その下部左右に文殊菩薩、普賢菩薩を脇待としてその下に十六善神を配した通常のもの。大般若経轉讀の際には、この画像が必ず用いられる。中央絵仏師の作とみられる。絵具が厚く、釋尊と脇待ははつきり浮き出ているが、厚塗りの褐色のバックの中の善神はその形が殆ど分りにくい程いたみがひどいが、かえって朦朧たるものが深みを感じさせ、芸術的雰囲気はこの上もなく美しい。

二点とも巖原町醴泉院より寄託のもの。(長崎県指定有形文化財)

対馬の弥生文化と本館収蔵資料

永留久恵

東アジアの進んだ農耕文化が、新しい神祭りと、金属製の道具を伴って日本列島に到来し、縄文文化の土壌の上に根を下したのが弥生文化である。この大陸文化の流れが、朝鮮半島より日本列島へ及ぶ時、対馬、香岐という二つの島が、沙漠の道におけるオアシスのように、海原の中の夢の国として、航路の目標となり、百船の泊地となった事情は説明するまでもない。

一昨年の秋、本館の開館を記念して催した展覧会において、対馬が自慢する陳列品の多くが、はからずも二つの時代に集中していることに驚いたものであるが、それは弥生時代と中世である。

弥生時代というまでもなく、日本も朝鮮もまだ統一国家はなく、倭人と韓人の区別はあったが、国境という厳めしい障壁はなかったから、人々は自由に往来したらしい。その頃の舶載品が対馬に多く遺っている。また中世という時代は、中央政府

のしめつけが緩んで、地方の自立性が強かったから、対馬は独自に朝鮮国と約条を結び、公然と通交し、彼地に居留した者も多く、時には「倭寇」と呼ばれる徒輩もいたが、海賊が本業だったわけではない。この時代の朝鮮(高麗、李朝)や中国(宋、元、明)の珍しい文物が対馬の神社や寺院に遺っていて、なかには大陸の諸国には消滅したものが、対馬に保存されている例も少なくない。

このような事情で、対馬の文化財が脚光を浴びることになったわけだが、その二つの目玉は弥生時代と中世である。

『魏志』(倭人伝)に、「所居絶島。……無良田、食海物自活、乗船南北市糶。」とあるように、食糧自給のできない対馬では、朝鮮(半島)と日本(列島)を肢にかけて、交易に活路を求めたもので、大陸製の貴重な文物を、日本に運び、日本の珍しい産物を朝鮮に運んだのではないかと思われる。

対馬の弥生時代は、北部九州と同じように、縄文終末の夜臼式と弥生初頭の板付Ⅰ式、同Ⅱ式を出す遺跡(豊玉町曾住吉平)に始まり、弥生の終末まで北九州と同様の編年をたどる。そして北九州の文化圏にあり

ながら、大陸渡来の石器や土器、青銅器、鉄器などが混入している例が多く、これが対馬の特色となっているわけである。

対馬の神社には、青銅の剣や矛、あるいは美しい石剣や石斧を神宝としている例をよく見るが、これらは古くからの伝世品である。近代になって、新しく発見された資料も多いが、これらのうち貴重なもの東博(旧帝室博物館)に収蔵され、戦後の発見分は文化庁に所管されている。

また戦後の学術調査による発掘品は、東亜考古学会および九学会連合同調査委員会より、対馬郷土資料館(現在厳原町資料館)に贈られ、その他峰町、豊玉町においては、独自に行った調査の発掘品を、町の収蔵庫に所有されている。

そこで本館に収容した資料としては、昭和四十三年より五年の間に、長崎県の委託により、九州大学考古学研究室が行った「対馬浅海湾沿岸遺跡調査」の発掘遺物を、本館の開館に当って移管してもらったのが中心で、外に若干の寄贈、寄託品を収めている。以下その概要を紹介するが、詳細は長崎県教育委員会発行の報告書「対馬」を見てほしい。

出土地	遺物(収蔵資料)	時期	備考
佐保浦赤崎	弥生土器(数個体分破片) 陶質土器(壺類破片)	後期 前期末	朝鮮系
佐保浦黒木	弥生土器(数個体分破片) 青銅馬鐔(劍鞘と疑問有)	後期初頭	袋状口縁有
仁位浦ハロウ	ガラス玉(小玉一〇〇〇個以上) 弥生土器(壺、高坏破片) 陶質土器(甕)	後期後半	長頸有 朝鮮系
貝口浦寺浦崎	磨製石剣(鉄劍形) 鉄刀子(厥手断片)	後期後半	退化形式
三根ガヤノキ	弥生土器(壺一個体分破片) 陶質土器(甕・隙)	後期終末	二重口縁 朝鮮系
古里塔ノ首	弥生土器(壺、外数個体破片) 陶質土器(甕、坩等破片) 銅鏡(内行花文鏡破片)	不明	繩子目文 格子目文
	双頭管状銅器、鉄剣、鉄刀 弥生土器(壺数個体分破片) 陶質土器(壺二個) 完形無文 赤焼土器(小形鉢) 完形 銅剣(完形八個) 銅矛(広形完形)	前期 漢	朝鮮系 朝鮮系
	銅鏡(方格規矩文鏡) 水晶粟玉(一個)、管玉(二個) ガラス玉(二、六〇〇余)	後期前半	朝鮮系
島山平野浦	弥生土器(壺、高坏、小形甕) 弥生土器(長頸壺)	後期初頭	袋状口縁
竹敷小式崎	鉄刀、鉄鈍(断片)	後期後半	

(以上の外、大船越、玉調の遺跡出土品および、浅海湾沿岸における採集品がある。)



無文土器

(伝) 難知出土

美津島町黒瀬の城山より出たという弥生土器が、古藤満氏より寄贈されたが、この遺物については昭和二十七年に、前所有者吉野兵磨氏の案内で、出土地の調査を行ったことがあるが、遺跡を確認することはできなかった。九学会連合編『対馬の自然と文化』「考古学から見た対馬」参照。

また難知出土と伝える見事な無文土器が、須川太郎氏より寄託されることになったが、これについては出土地や関係資料を調べてから、改めて紹介することにした。

斎藤家文書について

白井 傳

昭和五十四年八月七日、厳原町大字今屋敷の斎藤定樹氏の家に伝承されていた古文書類を一括、資料館に寄託を受けました。斎藤家は遠く宗氏の家老の職にあられた古い家柄で、先に寄託を受けた宗家文庫と共に、貴重な資料として役立つものと思えます。現在整理中ですが、その概要を記してみます。

書籍類 (含写本) 四六九冊

九卷

一巻

記録類 (含絵図)

八八冊

六卷

一箱

一袋

一級

一一帖

書翰類

四四八通

其他器物類

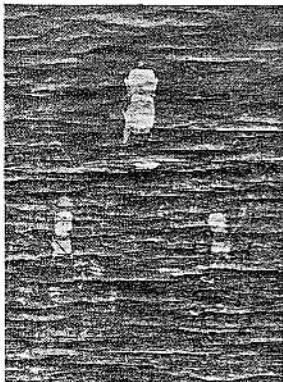
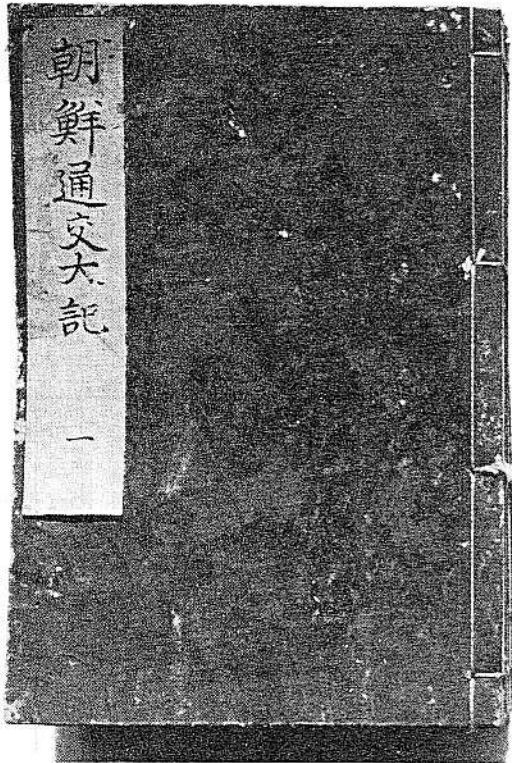
九点

以上の通りですが、書籍類の中には、「津島紀事抜抄」「橘窓茶話」「農政問答」「閑窓独言」「柳川実記」「御国家古今盛衰之惣論」「古

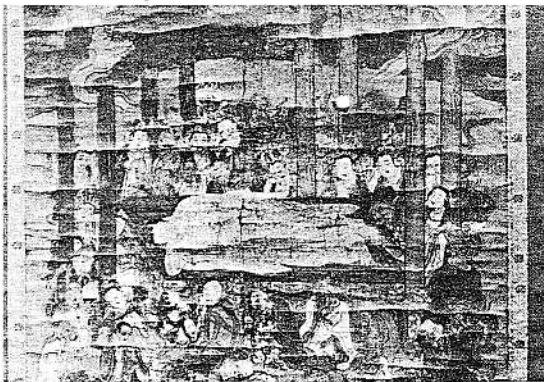
今武家盛衰記」「六経略説」「古易断」「八幡宮本記」「農術鑑正記」「理学提要」などの書名も見え、又記録類には「朝鮮信使絵巻」四巻を始め、「朝鮮絵図」「朝鮮通用之図書」「信使記録」「家譜」「系図類」など幾多の記録類、書状などがあります。

ふるぶみ抄

しみるへるかみをはがしてふるぶみをよみてしあればうめのかにほふいくとせをへにけるものかつちいろのですきわがみのかにたつあはれひねもすをひとりもだしてやれがみをひらきてあればはるたちかへるいくをりのふるぶみひらきたどりつとほきみおやのみちをしぞおもふ



釈迦十六善神図



仏涅槃図